

第1部 名東区の変遷

第1章 自然と環境

1 位置・境域及び面積

名古屋市は、東経136度47分41秒から東経137度3分50秒、北緯35度1分50秒から北緯35度15分26秒に位置し、極東及び極北は守山区、極西及び極南は港区にあります。

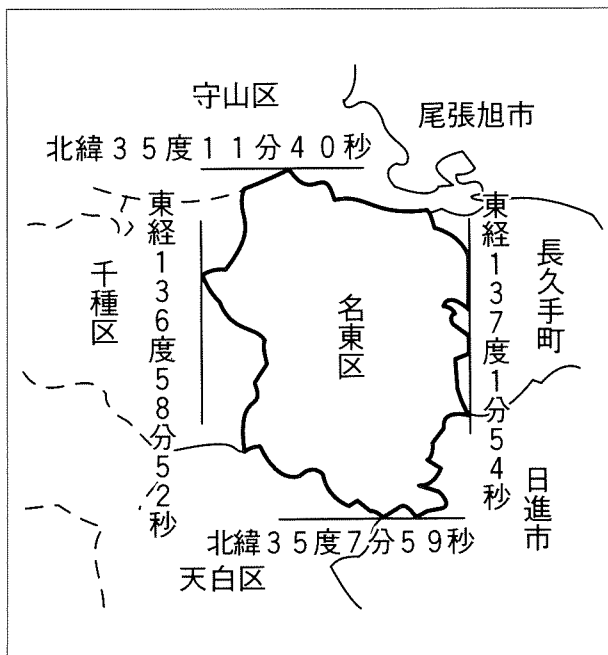
両極の経線間（東西）及び緯線間（南北）の距離は、それぞれ25.53km及び25.09kmです。

名東区は、名古屋市の東部、東経136度58分52秒から東経137度1分45秒、北緯35度7分59秒から北緯35度11分40秒に位置し、東経137度線と北緯35度10分線で4分割されています。

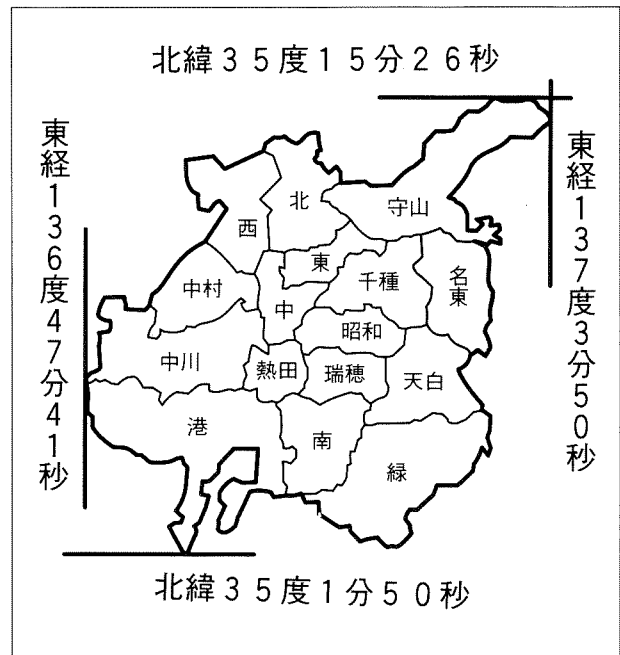
極東は猪高町大字上社字井堀、極西は平和が丘一丁目、極南は梅森坂五丁目、極北は猪高町大字猪子石原字北川原にあり、両極の経線間及び緯線間の距離は、それぞれ、4.53km及び6.80kmです。

北は名古屋市守山区、西は名古屋市千種区、南は名古屋市天白区及び日進市、東は日進市及び愛知県長久手町に接しています。

面積は、19.46km²で、名古屋市の面積326.37km²の約6%を占め、16区中港区、緑区、守山区、中川区、天白区に次ぎ、6番目です。



名東区位置図



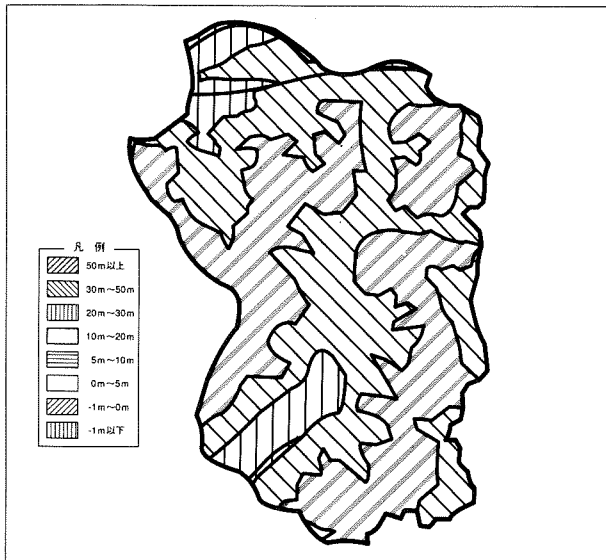
名古屋市位置図

2 地形と地質

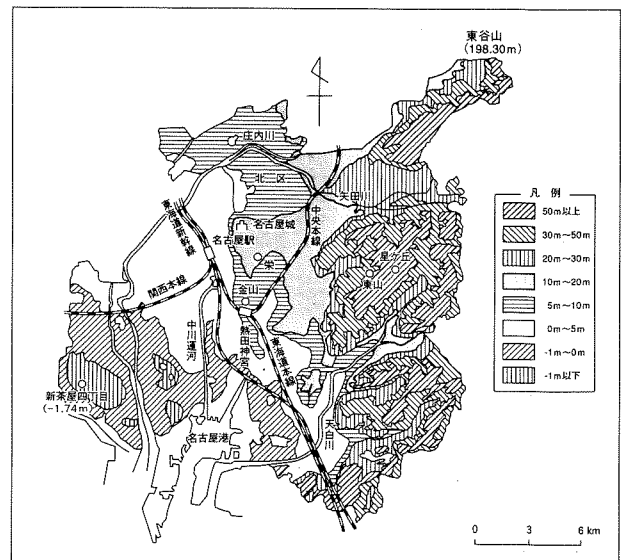
(1) 地形

名古屋市を概観すると西部に海拔0 m以下を含む低地があり、東へ行くに従い少しずつ高度を増していき东部には東山丘陵または八事丘陵と呼ばれる100 m前後の丘陵が連なっています。

市内の最高点は守山区の東谷山で198.30 m、最も低い地点は港区新茶屋四丁目地内で-1.74 mです。



名東区の地形図



名古屋市の地形図

名東区は東部丘陵に位置しますが、子細に眺めると矢田川、香流川及び植田川の周辺が低く、標高30 m前後であり、地下鉄沿線も比較的低く一社駅付近が40 mで東に行くに従い徐々に高度を増し藤ヶ丘駅付近では約55 mです。

区の西部と東部が高く平和が丘及び藤巻町の高い所で約80 m及び約90 mであり、また、最高点は猪高緑地の御岳神社内で108.6 mの三角点があります。

その他の代表的な場所の標高は、区役所が約45 m、東名高速道路名古屋インターチェンジが約50 m、明德公園が約50 mから70 m、牧野ヶ池が約40 mです。

東部丘陵地を前述の3つの河川が浸食して低い地域が形成されたと考えられます。

(2) 地質

何十億年にもわたる地球の歴史の中で少しずつ現在の地形・地質が形成され、今の日本列島ができあがりました。

日本最古の岩石は、約20億年前のものといわれていますが、化石から確かめられる最古の地層は約4億年前のもので、そのころの日本列島は、浅い海の底と考えられています。

2億から3億年前の古生代末期の愛知県はやはり海の底であり、その海にはフズリナ、サンゴ、海ユリ等が栄えていました。その後、海進、海退あるいは現在の名古屋市を含む愛知県付近が湖であった東海湖の時代を経て名古屋付近の基盤は、新第三紀以前に形成されました。

矢田川累層は、新第三紀後期に生じた東海湖に堆積した陸性層で、名東区ではこの矢田川累層が露出しています。この層は、シルト層、砂層、砂礫層から構成され貧弱な亜炭層も含まれ、かつては、名東

年代紀

地 質 時 代				絶対年代	
新 生 代	第四紀	沖 積 世		1 万	
		洪 積 世		200万	
	第三紀	新第三紀	鮮 新 世		600万
			中 新 世		2,300万
		古第三紀	漸 新 世		7,000万
			始 新 世		
			暁 新 世		1.4億
	中生代	白 亜 紀		1.9億	
ジュラ 期		2.3億			
三 疊 紀					
古 生 代	二 疊 紀		4.0億		
	石 炭 紀				
	デ ボ ン 紀				
	シルリア 紀				
	オルドビス 紀				
先カン リア 代	カンブリア 紀		5.7億		
	原 生 代				
時代		始 生 代			

区でも亜炭が産出していました。

唐山層や八事層は、第四紀に堆積した地層で、唐山層は厚さ10mにも満たず、大きな礫層から成っており、石英斑岩、凝灰岩、チャート、ホルンフェルス等の円礫が中心で風化が進んでいます。

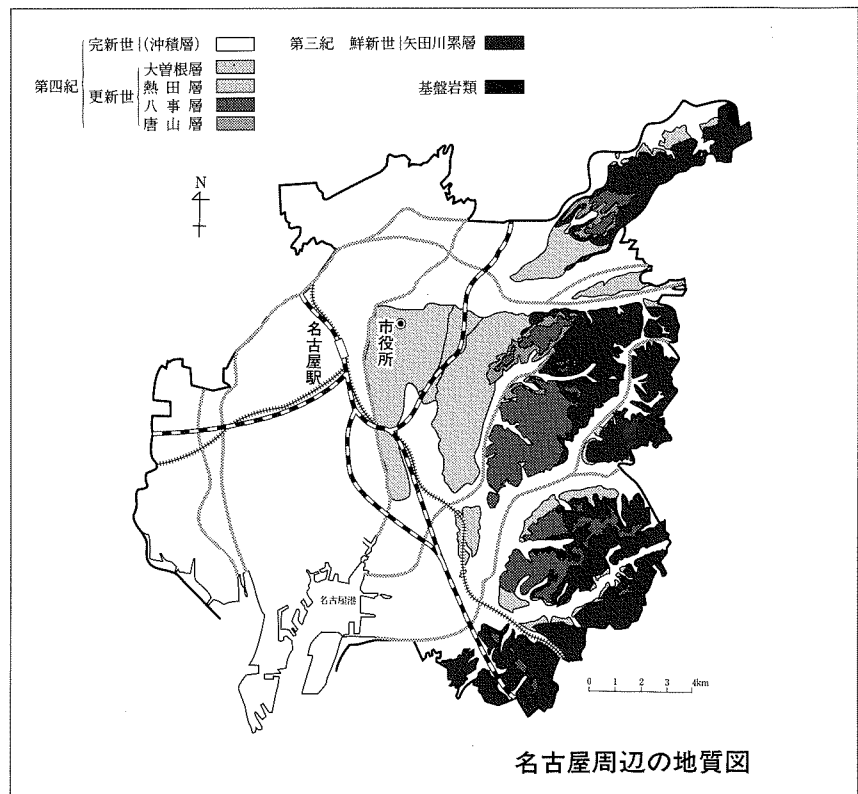
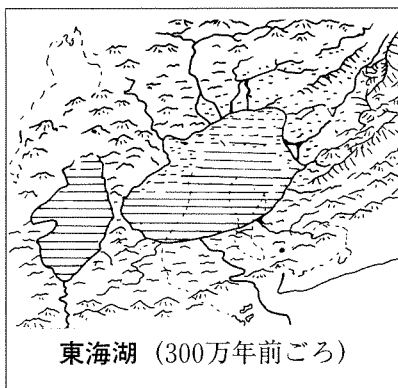
八事層は、唐山層より新しくチャート礫を中心とした層で遠くから見るとオレンジ色をしており厚さは30mほどです。

熱田層は、標高5mから20mで熱田台地を形成し名古屋城がこの台地の西北端、沖積平野の濃尾平野を見渡せる位置にあることはよく知られています。20万年から3万年前にこの地方に入り込んでいた海に堆積した層で、サメの歯、ウニ、カニ等の化石が産出します。また、上部にはオレンジ色の軽石が多く含まれ、これは3.5万年前に御岳山の噴火により噴出したものが木曽川によって運ばれ堆積したものと考えられています。

大曾根層は、この後最後の氷河期が訪れ、海面が低下し伊勢湾が後退した時に流入した河川の浸食及び堆積によりできたもので厚さ約5mの層です。

約1万年前に最後の氷河期が終わり海面が上昇し、濃尾平野に海水が進入し、この時期を縄文海進期といいます。

その後、後退する海に河川が運び込んだ土砂により沖積平野が形成されました。熱田台地の西側には庄内川、矢田川により形成された沖積平野が広がり、名東区内にも香流川、矢田川、植田川及び旧河道周辺には、沖積層が見られます。



3 河川・池

区の北部、守山区との境には、瀬戸市を上流端とした矢田川が流れ、名古屋市北部で庄内川と合流し市の西部を通り名古屋港に注いでいます。

矢田川の南には、長久手町を上流端とした香流川があり矢田川に合流しています。

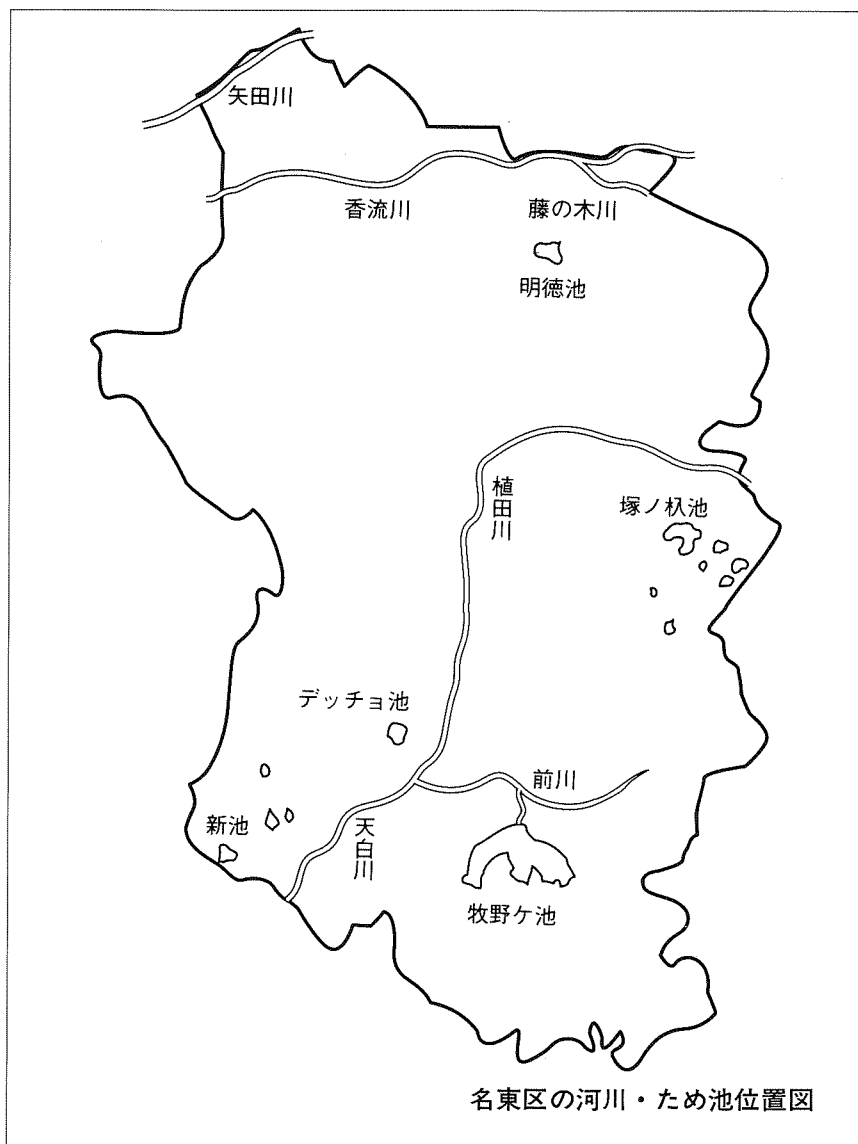
この香流川には、同じく長久手町を上流端とした藤の木川が合流しています。

また、長久手町から植田川が、東名高速道路名古屋インターチェンジ、地下鉄東山線に沿って西に流れ、東名阪自動車道上社ジャンクション付近で南に向きを変え区の中央を流れ、途中、前川を合わせさらに天白川と名を変え名古屋港に注いでいます。

池はほとんどがため池で、かつて、名古屋市内には、農業用水の取水が困難な東部丘陵地を中心に300を超えるため池がありましたが、昭和40年代の高度成長期以後の宅地開発により農地が減少し、それに伴いため池も急激に減りました。

市内には147のため池があり緑区の78、守山区の32に次ぎ名東区には18のため池があります。中でも、牧野ケ池は、市内最大の池で周囲約3 km、面積約22万9千㎡です。

なお、明德池は東側堤防が階段式に整備され、魚釣り池として親しまれています。



名東区の主なため池
(平成元年1月)

名 称	面 積 (㎡)
牧野ケ池	229,166
塚ノ杵池	32,113
デッチョ池	17,950
明 徳 池	16,377
新 池	11,918
西 堀 池	9,613
井堀下池	6,886
井堀上池	5,157

4 気候

(1) 名古屋の気候の概要

北半球の中緯度にあつて、ユーラシア大陸の東岸に位置し、まわりを海に囲まれた日本の気候特性は、寒暖・湿度の程度からみると北海道の一部を除き「高温多雨型気候」として分類されています。

また、日本列島は南北に細長く脊梁山脈のある地形的な条件を考慮すると名古屋は「太平洋側気候・東海」に入り、暖候期の高温・多雨、寒候期の少雨・乾燥で特徴づけられます。

名古屋は、伊勢湾の奥にあつて黒潮の影響をほとんど受けず内陸性に近い気候となっており、また、日本海までの距離が比較的近く冬期は関東地方と異なり関ヶ原などの山あいを通る季節風による降雪がみられ積雪を観測することもあります。

名古屋の季節区分

季節	期間	気圧配置と気象
春	2月下旬後半～3月上旬	冬型まだ多いが、移動性高気圧も現れ、気温急上昇を始める。
	3月中旬	移動性高気圧が時々現れ、天気は周期変化する。
	3月下旬～4月初め	平均気温が10℃をこえ、最高気温は15℃以上となる。
	4月上旬後半～4月中旬	北高型となり、前線が停滞して、「業種梅雨」が現れやすい。
	4月下旬～5月上旬	高気圧と気圧の谷が交互に通る、天気は周期的に変わる。
	5月中旬～6月上旬	平均気温は15℃、最高気温は20℃をこえる。
梅雨	6月中旬～6月下旬前半	南高北低型が現れ、天気安定することが多い。
	6月末～7月初め	梅雨期の前半でオホーツク海高気圧が発達し、梅雨前線は南海上のことが多い。
	7月上旬後半～7月中頃	梅雨最盛期で前線が接近し、活動が活発化することが多い。
夏	7月中旬後半～8月上旬	梅雨末期前線が一時的に北上することがある。
	8月中旬～9月上旬前半	夏型が安定し、暑い晴れの日が多い。暑さのピークは8月上旬前半。
秋雨・台風	8月中旬～9月上旬前半	夏型多いが上空の寒気南下し、不安定な天気も現れる。
	9月上旬後半～10月上旬初め	秋雨前線や台風の影響を受け、曇りや雨の日が多くなる。
秋	10月上旬中頃～11月上旬	最高気温は30℃以下から25℃以下になる。
	11月中旬～11月下旬	移動性高気圧や帯状高気圧におおわれやすく晴れの日が多い。
	12月中旬～12月下旬	冬型現れ、季節風の吹く日がある。
冬	12月上旬中頃～11月上旬	最高気温は15℃以下、平均気温は10℃以下となる。
	12月初め～12月下旬前半	冬型多くなるが、寒気の規模はまだ小さい。
	12月末～1月中旬前半	冬型続きやすい。最低気温が氷点下になる。
	1月中旬後半～1月末	冬型続きやすい。寒さのピーク。
冬	2月初め～2月下旬中頃	冬型多いが、低気圧も通るようになる。気温は上昇傾向に転じる。

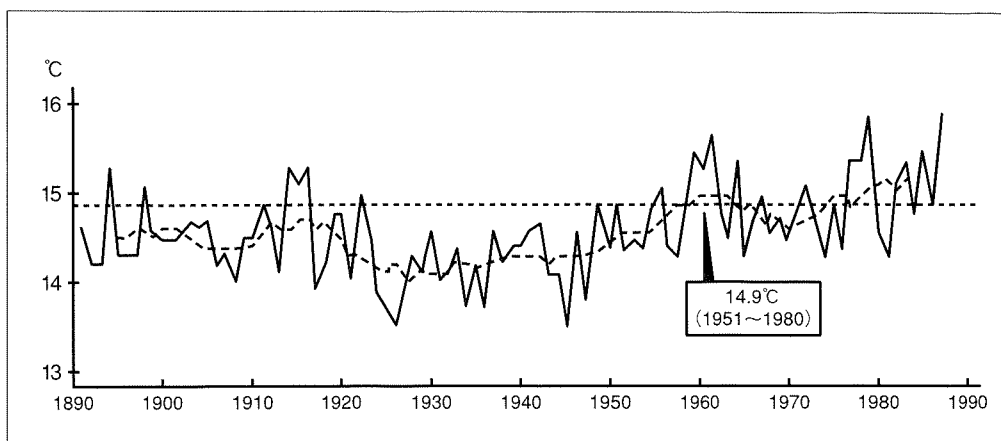
名古屋の気候を東京・大阪と比較してみると、三都市の間に大きな差はありません。ただ、冬期は積雪が多く日照の短い名古屋の方が東京よりやや過ごしにくいかもしれません。8月の暑さでは、平均気温が高いのは大阪、最高気温の極値と平均湿度が高いのは名古屋です。名古屋が最も暑いとはいいきませんが、蒸し暑さと、著しい高温の現れやすさが名古屋の酷暑を印象づけているようです。季節的なバラツキや生活面での慣れもあるので、一概にどこが良いとはいいきれません。

(2) 名古屋の気候の長期傾向

気候は、気温や降水量などの気象要素を長期にわたって平均した値で表されます。期間の取りかたによってさまざまな変化があります。ここ約100年間の傾向は次のとおりです。

① 気温

名古屋における平均気温



(名古屋における年平均気温（実線）と9年移動平均（波線）の累年経過)

1920年代中頃から40年代中頃にかけての低温期、その後の高温傾向がめだち特に1960年代前後と最近の高温が著しく、年毎に変化をしながら20年程度のリズムで変化しさらに長い周期の変化もしているようです。

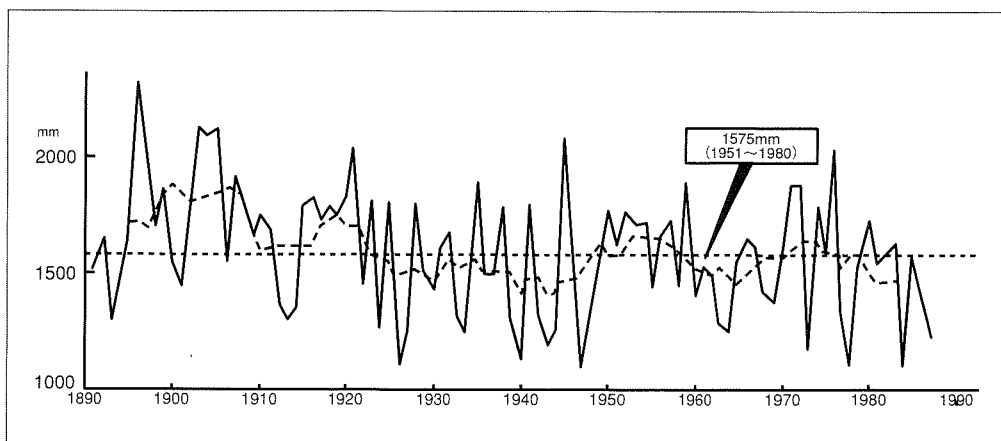
なお、最近では地球的規模の温暖化現象が話題になっています。

② 降水量

気温に比べ年毎の変動が大きいですが移動平均をしてみると1900年頃、20年頃、50年代、70年代の多雨期、1940年代、60年代、80年代の少雨期と20年程度のリズムが認められ、また次第に少雨化の傾向もうかがわれ、ここ10年位は特に著しいようです。

これらの特性は、1970年代に中部地方で前線や台風の影響を受け多雨年が多かったことを除き全国的にもみられます。

名古屋における年降水量



(名古屋における年降水量（実線）と9年移動平均（波線）の累年経過)

5 自然災害

(1) 風水害

① 台風

愛知県下に大きな被害をもたらした台風のうち、昭和34年9月26日襲来した伊勢湾台風は記録的な暴風と高潮を伴い日本の台風史上最大の被害をもたらしました。

愛知県地方に大きな風水害を与える台風は、9月に多く上陸しています。

台風は、一般的に北上するので名古屋の西側を通ると台風を運ぶ一般流に中心部に吹き込む南寄りの風が加わり風は強まります。反対に名古屋の東側を通れば中心部に吹き込む北寄りの風は、一般流との相殺によって弱められ、また、陸上を渡ってくるため地形・地物の摩擦でさらに弱まり、台風が西側を通過する場合の南寄りの風に比べて風速はかなり小さくなります。

名古屋で風速20m以上の風を観測した台風の通過経路は、中心がごく近くを通った場合を除きすべて名古屋の西側を北上しています。

また、台風は、南方洋上に発生するので暖湿気流が南方から多量に送られてきます。そのため、日本付近にある前線が活発になり、その北側に大雨を降らせます。さらに台風が北上すると前線は北に押し上げられ、前線の南側は台風の風系に入るので台風自体の雨がときどき強く降るようになります。台風が、名古屋の西側を通過するときは、台風の右半分に入り南寄りの暖湿気流が強く雨量は多くなります。死者・不明者5,000人以上の被害をもたらした名古屋市にも大打撃を与えた伊勢湾台風の概略を紹介します。

◇ 伊勢湾台風の概略

[上陸年月日] 昭和34年9月26日

[台風発生経過]

9月22日9時にマリアナ東海域で発生した台風15号は次第に勢力を強めながら北西の方向に進み、潮岬の南およそ1,000kmの海上に達したころには、中心気圧894hPa、最大風速75%という超大型の台風となった。

その後、26日18時過ぎに潮岬に上陸し、図に示すようなルートで東海・北陸地方を縦断し、27日0時45分ごろに日本海へ抜けた。

[名古屋地方の状況]

超大型の勢力を保ちつつ、市の西側を通過したため、非常に大きな影響を受けた。最大風速としては、22時に37%を記録し降雨も時間雨量40～70mmの状態が数時間にわたって継続した。

一方、伊勢湾においては高潮状態となり、河口付近のいたる所で堤防が欠壊するとともに、貯木場の材木が大量に流出し、市南部方面に大被害が発生した。



台風の経路

② 集中豪雨

梅雨期の大雨による水害は、台風に伴う大雨による水害とほぼ同様の割合で発生しています。

梅雨前線による大雨は、梅雨明け直前に起こることが多く、それまでに河川の水位はかなり上昇しているため梅雨末期に流域で大雨が降るとたちまち警戒水位を越え、堤防の決壊を招きやすくなります。

また、梅雨前線の雨は台風に伴う雨と異なり比較的長時間にわたって降り続き、特に下層に湿舌と呼ばれる湿った暖かい空気が入り、上層に強い寒気が入ると驚異的な集中豪雨を降らせることがあります。このほか、夏季に雷雲の発生を原因とするもの、秋雨前線が活発化したことなどにより集中豪雨が起こっています。

近年、都市の中小河川のはん濫、排水能力不足による浸水等が発生しやすくなっています。昭和58年9月28日名東区等において児童4名の死者を出した集中豪雨は記憶に新しいところです。

過去の主な風水害

年 月 日	種 別 (名 称)	名 古 屋 の 記 録			区 内 の 被 害 概 要
		最低気圧	最大風速 風 向	総雨量	
昭54.9.24~25	大 雨	hPa	％	mm	床下浸水 14
昭55.8.26~27	大 雨			142	床下浸水 6
昭57.8.8	大 雨			129	床下浸水 8
昭58.9.28	大 雨 (台風10号)	992.2	9.5 北	251.0	死者 2、床上浸水 7 床下浸水 190、道路損壊 6 堤防損壊 1、がけくずれ 3
昭63.9.20	大 雨			153.0	床上浸水 3、床下浸水 6
昭63.9.25	大 雨			183.0	床下浸水 1
平3.9.18	大雨 (台風18号)	987.6	7.7 西南西	253.5	床上浸水 1、床下浸水 13

(2) 地震

日本は、環太平洋地震帯に位置し、地殻変動が激しく有史以来幾度となく大地震に見舞われてきましたが、今後とも同様の傾向が続くものと考えられます。

地球の表面は、いくつかのプレートでおおわれており、大きな地震は、プレートの境目でプレートが他のプレートの下にもぐり込んだ時にたまった歪みの反動で起こると考えられています。

近年では、駿河湾からその沖合を震源とする「東海地震」が発生する可能性が指摘されています。

名古屋で震度3以上の地震

年 別 \ 震 度	3	4	5	計
昭和元年～10年	4	3	0	7
昭和11年～20年	14	2	1	17
昭和21年～30年	8	3	0	11
昭和31年～40年	4	2	0	6
昭和41年～50年	6	2	0	8
昭和51年～60年	8	1	0	9
昭和61年～平成元年	2	0	0	2
計	46	13	1	60

名古屋で死者のあった地震（明治以降）

年 月 日	地 震 名	人 的 被 害		建 物 被 害		震 源 地	震 度 (名古屋)
		死 者	負 傷 者	全 壊	半 壊		
明治24年10月28日	濃尾地震	190人	499人	2,109戸	2,406戸	岐阜県本巣郡能郷村	6
昭和19年12月7日	東南海地震	51	191	1,197	6,219	熊野灘	5
昭和20年1月13日	三河地震	8	19	186	547	渥美湾	4

6 植物と生物

(1) 植生

植生とは、ある地域に集合して生えている植物集団を意味しますが、東海地方は大部分が暖温帯に属し、標高の低い地域は暖温帯常緑広葉樹林です。

市内の山林は、古くから人為的影響の少ない天然林の比率が高く、自然植生としては、カシ・シイ類が主体で、大部分がコナラ・アベマキ・アカマツなどからなる二次林です。森林は、名東区の猪高緑地を含む東部丘陵地を中心にクロマツ・スギ・ヒノキの人工林とカシ・シイ・コナラ・ハンノキ・モチノキ・アカシアその他の低木類等の天然林から形成されています。

また、市街地の街路樹のほか、神社仏閣にはクロマツ・クスノキ・クロガネモチ・エノキ・イチョウ等が見られます。

(2) 生物

かつて住んでいたといわれるイノシシ・シカ等の大型哺乳類はもはや見ることはできませんが、ため池の周辺に形成された緑地帯では多くの野鳥を観察することができます。

明德公園では、シジュウカラ・メジロ・エナガの混群を始めリビタキ・アオジ等37種が、猪高緑地では、それに加えてコゲラ・キジ等50種が観察されています。

牧野ヶ池の東側にはアシ原が広がり、アオジ・ビンズイ等を始めカモ類を中心とした水鳥の絶好の越冬地となっており、春の渡りの時期には、エゾクイムシ・キビタキも見られ、また、アオゲラ・シマアジ・オオバンも見られます。

また、魚類については、猪高緑地の塚ノ杵池でブラックバス・ブルーギル・フナ・コイ・ライギョ等が、爬虫類については、同じ場所でサンショウウオ・アカガエル・ウシガエル等が見られます。

第2章 名東区の歴史

1 江戸時代以前

(1) 太古の海岸線

今から2千万年前の第三紀鮮新世の頃、地球は激しい褶曲や火山活動が活発に起こり、次第に現在の日本列島の姿に近い地形になってきました。この時期には海進・海退が繰り返され原始林が繁茂しては海没、枯倒して流木となり海岸線に打ち寄せられていました。昭和30年代の初頭まで盛んに掘り出された岩木（亜炭）は、これらの原始林の化石です。亜炭の埋まっている地層の分布を尾張夾炭層と呼び知多半島から緑、天白、名東、日進、長久手、尾張旭、志段味、高蔵寺を経て岐阜県に及んでいます。

(2) 人類文明の黎明

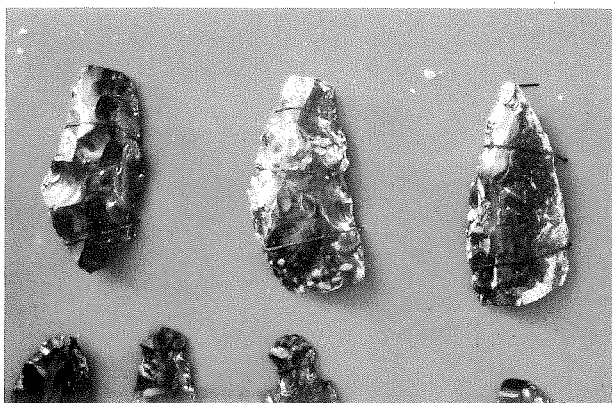
名古屋の地に人が住み始めたのは今から約3万年前から1万3千年前の後期旧石器時代のことです。その頃は冷涼な気候が続き日本はまだ大陸と陸続きでした。ナウマンゾウやオオツノジカなどの大型動物を追って、人も次第にシベリア方面から南下してきたものと思われます。

旧石器時代の人々は、簡単な石の道具を用いて動物を捕獲する狩人で、まだ土器作りも農耕も知りませんでした。石を割ってその割れ口の鋭さを利用する「ナイフ形石器」を使っていました。

やがて石器も研磨を施したものなどが現れ種類も多くなり、矢じり、槍、斧なども作られるようになりました。縄文式の土器も作られるようになりましたが、稲作はまだ始まっておらず、狩猟、採取生活をしていました。高針学区の松井土地区画整理事業の区域内から、矢じり（黒よう石）や石槍、石斧が大量に出土し、現在宮嶋考古資料館に保存されています。また、縄文晩期（紀元前5世紀頃）のものと思われる甕棺が名東学区の瓶井遺跡からほぼ完全な姿で発見されましたが、発見された当時のいきさつを知っている関係者が相次いで亡くなられたために、現在どこに保存されているのか全く分からなくなってしまいました。



宮嶋考古資料館



出土品

(3) 稲作の始まり

紀元前3世紀の終り頃、北九州地方に渡来した人々によって稲作農耕が伝えられました。これらの人々は稲作技術のほかに、青銅器、鉄器などの新しい技術も伝えました。やがてこの新文化は西日本から大阪湾を経て伊勢湾沿岸に伝わってきました。狩猟生活を基盤としていた縄文文化圏はやがて、これらの新技術を持った人々との対立、融合を経て稲作を生活の基盤とした弥生時代へと移っていきました。

(4) 豪族の出現

稲作が広まるにつれ人々は次第に集落を形成し、やがて小さな国ができるようになり、尾張氏や物部氏などの豪族が出現し、これらの豪族の支配者が古墳を造らせました。

名東区にも古墳時代の初期の古墳と思われる高針古墳がありました。全長5m、高さ1m、幅2.5mと古墳としては規模が小さいものです。この古墳からは、大正末期の道路建設中に横瓶が出土しました。現在この横瓶は東勝寺に保存されています。昭和46年4月から発掘調査が始まりましたが、関係者の急逝により中止され、現在は道路となっています。

(5) 大和朝廷の東進

大和朝廷が全国支配を進めていく過程で、当時この地方を支配していた尾張氏が大和朝廷と姻戚関係を結びながら、大和朝廷の支配体制の確立に大きな役割を果たしていたことが、朝廷の三種の神器に数えられるほどの草薙剣が、尾張氏の氏神とされる熱田社に祭られていることからもうかがえます。

大化の改新を機に、天皇を中心とする中央集権国家を作るため、それまで地方豪族が支配していた土地と人民は朝廷のものとされ、地方へは朝廷から命令を受けた役人（国司）が遣わされ、人民は朝廷から与えられた土地を耕し税を納める統治制度が作られました。尾張国は8郡に分かれ、国府は現在の稲沢市におかれました。

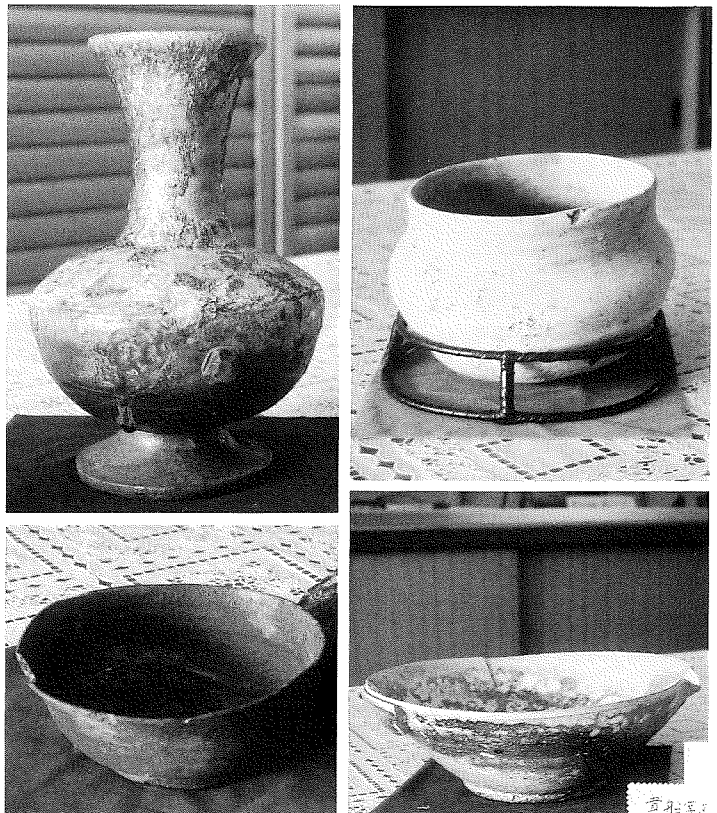
尾張国の郡名は中嶋、海部、葉栗、丹羽、春部（かすかべ）、山田、愛智、智多と「和名類聚抄」にあります。また山田郡に属する郷として、船木、主恵、石作、志談、山口、加世、両村の名が載っています。名東区は山田郡に属していましたが、山田郡は太閤検地の時に、春部郡と愛智郡に分属され消滅してしまいました。

(6) 高針の須恵器

名古屋の地では古墳時代後期（5世紀末）に、現在の東山公園方面を中心として須恵器の生産が開始されました。東山を中心に多くの古窯のあとが発見され、これらを総称して東山古窯址群といいます。やがて東山から、東、北、南の方面に伝えられ猿投山西南麓古窯址群を形成しました。

奈良時代中頃には猪高にも伝わり、日進、東郷、猿投から瀬戸へ伝えられ瀬戸焼となりました。また猿投から緑区、知多、常滑と伝わり常滑焼となりました。

区内いたる所から、須恵器や山茶碗の出土があり、高杯、長頸壺、甕などが宮鳴考古資料館に保存されています。



(宮鳴考古資料館蔵)

(7) 山田荘

人口の増加に伴い奈良時代頃から土地が不足するようになり、朝廷は墾田永代私有令を定めて開墾を奨励し、開墾した土地の私有が認められるようになりました。その結果、地方の豪族を中心に多くの荘園が作られました。

仁平3年の「東大寺諸荘園文書目録」には山田荘の名があります。尾張東北部の丘陵地帯には、篠木荘（春日井市）、小弓荘（江南、小牧市）と同じように未開の山野を囲む形で山田荘が形成されました。山田荘は西区、名東区、守山区などに散在した形態をとっていますが、山田郡内に限られ、清和源氏の流れをくむ山田氏が、川辺荘、狩津荘とともに、開発したものと思われます。山田荘は建保元年(1213)には後鳥羽上皇のもとに寄進されました。

承久の乱の時、山田氏は上皇側について戦いましたが、高針の蓮教寺は、山田次郎重忠のゆかりの寺として、幕府軍によって焼き払われたといわれています。

(8) 守護による支配

南北朝期、14世紀の中頃の尾張は強力な守護土岐頼康が支配し、当時国人と呼ばれた地方武士を被官化していました。しかし中には南朝方に立つ者、直接幕府と結ぼうとする者など、地方武士達は多様な対応をしていました。

南北朝統一後の応永7年（1400）頃、越前守護斯波義重が尾張の守護を兼任することとなり、足利一門で中央政界の有力者である斯波氏による尾張の守護領支配が、これから150年続きました。一色城はこの頃、斯波氏の命令により柴田源六勝重が、今川氏などの三河、遠江方面の勢力の進出を防ぐために築城したものです。

(9) 戦国乱世

中央の政務を預かる守護斯波氏に代わって実質的に尾張の支配を行ったのは、守護代の織田氏でした。

やがて応仁の乱が始まると織田氏も東西に分かれて争いました。文明11年（1479）に和議が成立し、織田敏定が清洲城を居城として尾張南部を、織田敏広が岩倉城を居城として尾張北部を分割支配しました。信長の祖父信定は清洲方の三奉行の一人で、津島地方を支配する領主でした。父信秀の代には領地を拡張し居城も那古野・古渡と移し、守護代を凌ぐ力を持つまでになりました。

信秀の死後、家督争いに勝った信長は清洲城を攻め落とし、ここに居城を移すとともに、岩倉方の織田家も攻略し、永禄2年（1559）には尾張を統一しました。

下社城で生まれた柴田勝家は信長の家臣として目覚ましい働きをし、「瓶割り柴田」の勇名を残しました。柴田勝家が生まれた下社城の跡地は現在明德寺となり、境内には城の名残の古井戸や、勝家手植えと伝えられる老松がありました。

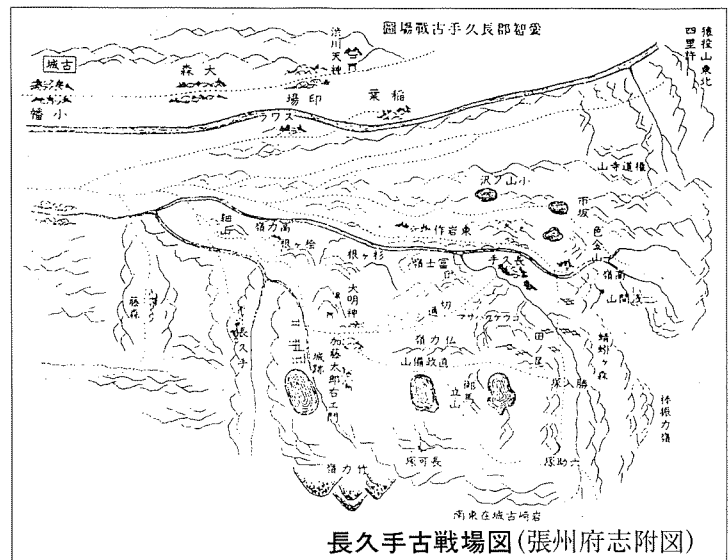


柴田勝家生誕の碑

(10) 小牧・長久手の戦い

天正10年（1582）に、本能寺の変で織田信長が倒れた後、尾張は信長の次男の信雄が相続することになりましたが、天下は柴田勝家を破った羽柴秀吉と、徳川家康との両雄の手に委ねられることとなりました。

家康は信長の遺子信雄を守るとして信雄と連合し、秀吉と対立しました。秀吉について大垣城主の池田信輝は、犬山城主中川勘右衛門の不在をついて犬山城を



奪取、清洲城に信雄を訪ねていた家康はただちに小牧山に出陣し、ここに小牧・長久手の戦いが始まりました。

両雄相睨み合う中、秀吉軍は家康の本拠地の岡崎を攻めて家康を動揺させようと、池田信輝、森長可、堀秀政、三好秀次に率いられた総勢1万7千の軍勢を岡崎に向け進軍させました。これを知った家康、信雄の連合軍は1万4千の兵を率いて、小牧山の本陣から小幡城に入り、ここで軍勢を二隊に分けて一隊は矢田川北岸を東進、もう一隊は小幡から矢田川を渡り、猪子石原から森孝新田方面に進軍し、長久手で合戦となりました。

天正12年4月7日の午前4時頃に始まった戦いは午後2時頃ようやく徳川方の勝利によって終わりました。秀吉は2万の援軍を率いて龍泉寺に午後4時頃到着、家康は午後4時半ごろ小幡城へ引き上げました。秀吉が龍泉寺まで来ているのを知った家康の家臣達は龍泉寺の夜襲を主張しましたが、家康はこれをなだめて夕闇にまぎれて小牧山の本陣に引き上げました。その後両雄は和睦して、二度と戦うことはありませんでした。

この長久手の戦いで、猪子石城、上社城、一色城、下社城が両軍の兵により焼け落ちたと伝えられています。また藤森城は、小牧・長久手の合戦の落武者だった小関三五郎が再起をはかるべく石が根付近に砦を築いて住み着いたものと伝えられています。

2 江戸時代

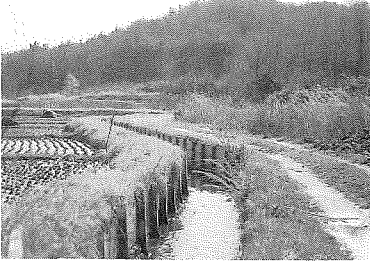
(1) 尾張藩

尾張藩は「尾張殿」と称され、御三家の筆頭として諸大名の中でも最高の格式をもっていました。慶長13年（1608）に徳川第二代将軍秀忠から、家康の九男の徳川義直に領地状が発せられて以降、16代藩主義宣が朝廷に藩籍を奉還し、名古屋藩知事に任命されるまでの約260年間藩政がしかれました。

江戸時代の村は、国奉行の下に代官や庄屋によって治められ、名東区の村々は、水野代官所の支配下にありました。

(2) 新田開発と牧野ケ池

江戸時代には新田開発が盛んに行われ、名東区でも高針新田、猪子石新田、一色新田、藤森新田などが作られましたが、山間丘陵地のためにあまり開墾は進みませんでした。また、河川は北に矢田川、香流川、中央に高針川がありましたが利水の便が悪く、多くの池沼が灌漑用水として利用されていました。江戸時代の初期には、幕府の手により数多くのため池が修復されました。



植田川（高針川）源流

牧野ケ池は県下有数の大池ですが、尾張藩の郡奉行、勝野太郎左衛門良政の尽力により、正保3年（1646）に完成しました。長さ240m、高さ9mの堤防工事は村の男たちが、導水用の堤は女たちがと、村人こぞっての大工事でした。

勝野氏の高德をたたえるべく、大正8年に池に面した高台に「勝野氏頌徳碑」が建てられました。碑文には、「肥沃な土地があっても灌漑の水が無くて良田を作ることができなかったが、勝野氏の御尽力により大池が完成してからは、幾度の干ばつに会っても稲を枯らすこともなく、村民こぞって団らんの楽しみを得ることができるようになった。これは一重に勝野氏のおかげです。（要約）」とあります。



牧野ケ池



高針街道（中馬街道）

(3) 高針街道

江戸時代になると高針街道（信州飯田街道の一部）は中馬街道として、信濃地方へ物資を運ぶ重要な街道となりました。東海道や中山道などの官道とちがって、関所などの煩わしい制約が無く、各宿場に常備された伝馬に積み替えて運ぶという規制も無かったので庶民の生活を支える大切な道として大いに発達しました。中馬というのは、荷物を馬の背を替えずに目的地まで運ぶ通し馬のことです。

名古屋や岡崎で買い集められた塩や魚の干物などの海産物は、中馬によって直送され、途中足助で「足助の俵」と呼ばれる、軽量の俵に積み替えられて、飯田、伊那、塩尻などの山里の人々に届けられました。

この中馬は明治になっても続き、一人で四頭の馬を連れた馬子が村にさしかかると、景気よく馬子唄を歌い上げるので、村人は「それ信濃さが来た」と言って喜んだということです。足助を朝出発すると、ちょうど高針で日が暮れるので、馬と馬子を泊めるために、高針に中馬宿がありました。昭和になっても農家がほとんどだったこの地方ですが、高針街道沿いは商店も立ち並び宿場町としての活気がありました。

3 明治大正時代

(1) 猪高村の誕生

明治5年(1872)に名古屋県が廃止されて愛知県が誕生しました。この時に県内を15大区に分け、それをいくつかの小区に分けました。この地方は猪子石原を除き第2大区の第12小区に属しました。

明治11年(1878)に、郡区町村編成法が施行されました。この時、一色村と下社村が合併して「一社村」ができました。初めは「いちやしろ」といっていましたが、いつの頃からか「いっしゃ」と呼ばれるようになりました。一社村、上社村、高針村は愛知郡の第36組として一つのまとまりをもち、高針に戸長役場が設けられました。戸長役場というのは村民の戸籍や住所を記録する役場のことです。また藤森村と猪子石村は長湫村(長久手)とともに第37組となり、藤森に戸長役場を置きました。

明治22年(1889)に市制町村制にもとづいて名古屋市が誕生しました。また高針村、一社村、上社村が合併して「高社村」ができ、高針の東勝寺に村役場を設けました。また、猪子石村と藤森村に、東春日井郡猪子石原村を併せて愛知郡「猪子石村」ができ、役場を猪子石の中島に置きました。

明治39年(1906)に政府は、戸数1千戸、人口5千人という合併の指標を設けて合併政策を推進しました。この政府の方針に従い、猪子石村と高社村とが合併して「猪高村」が誕生しました。

合併に際しては

1. 川の流域による合併案

高針川—————高社村・植田村

香流川—————猪子石村・鍋屋上野村・大幸村

2. 街道による合併案

中馬街道—————高社村・末森村

山口街道—————猪子石村・鍋屋上野村

3. 人情、風俗による合併案

の3つが出されましたが第3案の人情、風俗による案がとられました。また、村名も旧山田荘から山田村との案もでしたが、両村から一字ずつ取って「猪高村」と名付けられました。村役場は当初は上社の観音寺の西堂を借りていましたが、大正3年には上社字丁田(現猪高小学校東)に新築移転しました。

(2) 高針亜炭

この地方には良質な亜炭が埋蔵されていて、江戸時代には岩木として掘り出されていましたが、本格的な採掘は明治30年に堀和孝三郎によって、優良亜炭の埋蔵が確認されてからです。

高針の亜炭は良質で名古屋に近いということで毎年産出量が増加し、石油やガスが普及する昭和20年代まで多くの人々に利用されました。最盛期には、高針街道が亜炭を積んだ荷馬車で埋まって、「黒街道」と呼ばれたほどだったそうです。



亜炭坑の風景 (大正時代)

(3) 村民の生活

この地方はもともと純農村で、農民は毎日暁から田畑に出掛け、晩に星がきらめく頃までよく働きました。

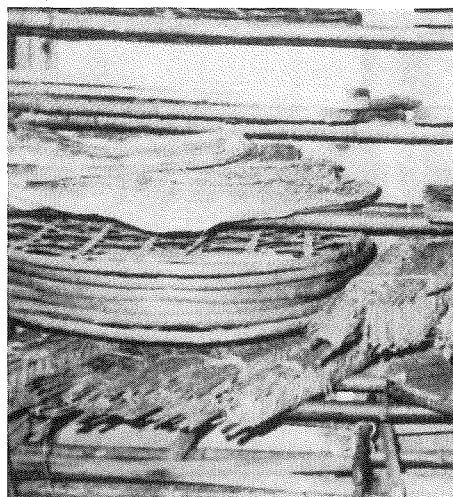
しかも、夕食が済めば直ちに夜なべに取り掛かり、ほの暗いカンテラの下で、^{こも}蓆を編んだり、縄をなったり、^{ぞうり}草履を作ったりで、今日の私たちの生活からは想像もできない毎日でした。

耕作の方法も先祖代々受け継がれた方法により、肥料も大部分は人糞尿で名古屋まで大八車で集めに行ったそうです。名古屋といっても、今の東新町あたりまではまったくの田舎で住吉町あたりまで行かないと汲み取りはさせてもらえず、おまけに家族一人あたり年にもち米一斗二升（明治35年からは六升）を払って肥料を確保していました。

当時は貧富の差がはなはだしく、大地主が5、6人であとはほとんどが小作人でした。地主に対して小作料の支払いが収穫の半分以上もあり、子沢山の家庭では半年分の飯米にも事欠く有様でした。

昭和22年の農地開放により農村は一変し、生活水準が平均化しました。また、商工業の発達により、名古屋の工場や商店で働く者、官庁に勤める者も増え純農村から次第に変貌していきました。

農作物にも変遷があり、養蚕、たばこの葉を作っていた時代もありました。養蚕は明治17、18年頃から始められ、明治の終りから大正の始めにはほとんどの農家で蚕を飼っていました。桑畑を作るために開墾も盛んに行われました。しかし昭和15年頃から戦争のための食糧増産に迫られ、また化学繊維が多く作られるようになり、次第に蚕を飼う農家は減っていきました。たばこの葉の栽培は相当昔から行われていましたが、政府の専売制になってからは、厳重な検査や調査が行われるようになりいろいろと制約があったことと、養蚕とは両立できなかったのも、明治末期以降はだんだんと衰退していきました。



かいこ棚



糸くり

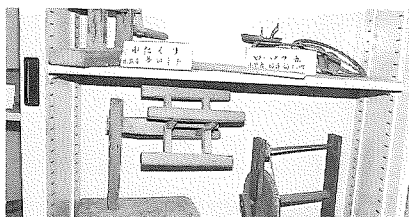


農耕の風景

当時の生活用品



ランプ・そろばん



わたくり・糸くり



まくら・ます

4 昭和時代

(1) 太平洋戦争の痛手

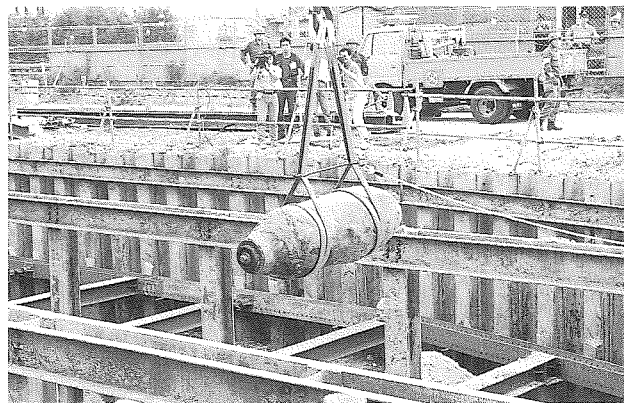
満州事変を契機に始まった中国との戦争は長期化の様相を呈し、政府は国民経済を国家の統制下に置くべく、昭和13年（1938）に国家総動員法を制定しました。そして翌年には価格統制令が発令され、すべての物価が凍結され、経済界や市民生活に大きな混乱と影響を及ぼしました。「ぜいたくは敵だ」という掛声のもとに消費生活が制限され、食糧や衣類などの必要不可欠なものまで最低限の切り詰めが強制されました。

日本は中国との戦争継続に必要な物資を確保するために仏領インドシナへ武力進出し、外国から非難を浴び、イギリス、オランダ、中国そしてアメリカから経済封鎖を受けました。アメリカは国内にある日本の資産をすべて凍結し、さらには日本に対する石油、鉄くず、羊毛の輸出を全面禁止しました。そして日本はアメリカとの全面戦争へと突入していったのです。貿易に依存していた日本経済は、経済封鎖によって自給自足の生活を強いられ、統制経済の締め付けがきわめて厳しくなり、ついには価格の高いヤミ物資が横行するようになりました。

昭和19年にサイパン、グアム、テニアンが相次いでアメリカ軍の手に落ちると、そこにB29爆撃機の基地が作られ、日本本土への直接空襲が本格化しました。昭和19年12月13日には三菱発動機大幸工場を爆撃目標にB29が80機飛来し、うち7機により本郷部落が爆撃され20戸が焼失、また5機が猪子石新田部落を爆撃し十数戸が焼失したのを皮切りに、終戦までに数度の空襲を受けました。B29による名古屋の空襲回数は「名古屋空襲を記録する会」の調べでは63回にものぼるということです。

太平洋戦争による戦死者の数は多数にのぼり、猪高村の戦死者は、日露戦争の時の10人、第一次世界大戦の時の2人に比べて、225人と桁違いに多く、昭和20年の猪高村の男子人口が3,510人であったこと、死亡した人の大多数が働き盛りの人達だったことを思うと、村の痛手は想像を絶するものがあります。

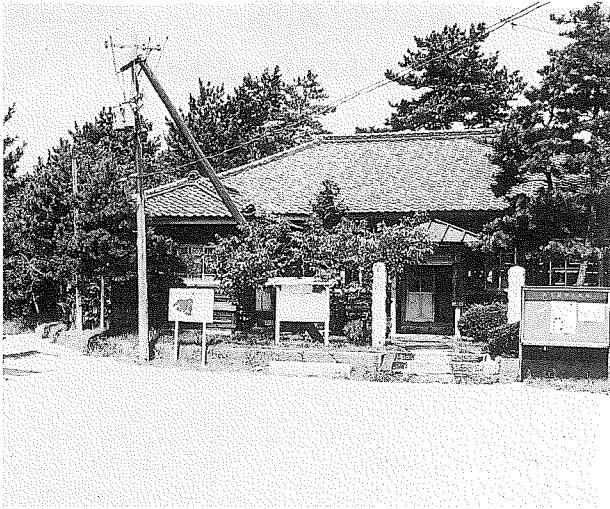
戦後50年たった、平成6年6月28日、陸前町内の一般国道302号線共同溝工事現場で「250kg不発弾」が発見され、7月3日、半径300m以内の避難対象地域の約900世帯、2,400人が避難する中、自衛隊による撤去作業が行われ、一時は交通規制するなどものものしい雰囲気には包まれましたが、午前9時30分から約1時間ほどで無事終了しました。



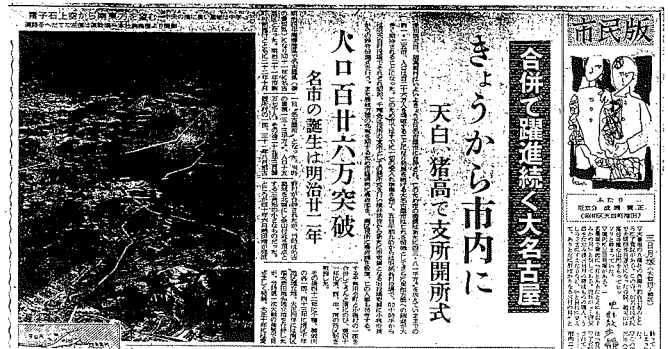
不発弾の処理

(2) 猪高村の名古屋市合併 —— 千種区猪高町 ——

名古屋市と近隣町村とはかねてより「名隣会」という親睦組織を作っていましたが、昭和28年10月に町村合併促進法が施行されると合併の気運が一気に高まりました。猪高村でもこの機を逃さず、合併促進委員会を設けて世論調査を実施、村民の賛成を背景に昭和29年10月30日の村議会にて満場一致で合併の議決をしました。同年11月15日名古屋市においても編入を議決、昭和30年3月16日愛知県議会で可決されました。



猪高支所



当時の新聞記事（中日新聞）

昭和30年4月5日猪高村は名古屋市と合併して、千種区猪高町となり村役場は千種区猪高支所となりました。合併当時の猪高町は人口8,519人、世帯数1,558世帯でした。

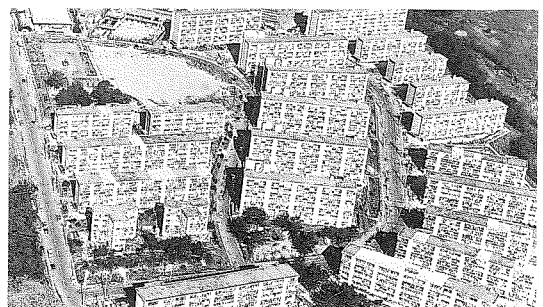
(3) ベッドタウンへの変貌

昭和31年に名古屋市の直轄で西山地区の区画整理が実施されたのを皮切りに、昭和35年には大廻間土地区画整理組合が設立され、以降次々と組合が設立されました。そして土地区画整理事業の実施地域は猪高町の区域の80%以上に上りました。事業の進行につれ、道路、上下水道、学校、公園、宅地などが整備され現在の名東区の発展の礎となりました。

名古屋市に合併した年に、まず高針地区で上水道が付設され、昭和40年には猪高町全域で上水道による給水が可能になりました。昭和31年に市バスが今池・上社間で運行されて以降、バス路線も整備され、昭和44年には地下鉄が藤ヶ丘まで延長されました。

市営住宅も昭和32・33年にかけて猪子石原住宅、猪子石原荘が建設されたのを皮切りに、天神下住宅、梅森荘、猪子石荘などが次々と建設されました。また西山地区には日本住宅公団により昭和36年までに1568戸の住宅が建設されました。引き続き公団により、藤ヶ丘市街地住宅、藤ノ木団地、西一社団地が建設され、併せて名古屋市および愛知県の住宅供給公社による住宅団地が建設されました。

こうした住宅開発により、昭和30年の名古屋市への合併から50年に名東区として分区独立するまでに世帯数は約11.5倍に、人口は約10倍にまで膨れ上がり、かつての農村風景は名古屋のベッドタウンとして変貌していきました。



市営梅森荘

(4) 地下鉄と東名高速道路

昭和44年4月に地下鉄が藤ヶ丘まで開通しました。名古屋市の当初の予定では上社付近までの路線延長が考えられていましたが、車両用地を予定していた猪子石地区で用地確保が困難になったとき、藤森東部土地区画整理組合から用地の申出があり、藤ヶ丘まで地下鉄が延長されることになりました。高針方面への延長も考えられていたようですが実現しませんでした。藤森東部土地区画整理組合では、車庫、駅、路線用地のために11haもの土地を無償提供しました。現在では名古屋市東部の交通拠点としてすばらしい発展を遂げた藤が丘地区ですが、地下鉄の話があった当初は地元の人でさえも、本当にこんな山奥に地下鉄が来るのかと半信半疑だったそうです。

東名高速道路は8年の歳月をかけて、昭和43年に一部開通し、昭和44年5月には東京・小牧間346.7kmが全面開通しました。名古屋インターチェンジの開設により、この地は名古屋の東玄関として重要な役割を果たすことになりました。

5 名東区の誕生とその後

(1) 名東区誕生

名古屋市の人口が200万人を突破した昭和44年頃から、人口のドーナツ化現象が起きました。ちなみに昭和47年には市内中心部の中、東、熱田区の人口が7万人なのに対して千種区の人口は23万人でした。昭和46年12月に市長は行政区の再編成について、市議会に意向を諮りました。市議会は第三者で組織した調査研究機関によって調査すべしとの回答を示し、市長は5名の学者を行政区域調査委員として委嘱しました。昭和47年12月には報告書が提出され、天白地区については分区独立が望ましいが、猪高地区については住民の意見がまとまっていないとして、分区を見合わせる方がよいという内容でした。その後、猪高地区では、分区に賛成する人々による議会への陳情がおこなわれ、また住民の意見を分区独立へとまとめあげていった結果、市議会の総務民生部会は、さきの報告書提出以降に猪高地区の住民の意向にかなりの変化が見られるので、猪高地区も天白地区と併せて分区独立することが妥当であるとの結論に達しました。以後、市民局に分区独立のための部門が設けられ、地元でも「猪高地区分区態勢整備



名東区役所

委員会」が組織され、分区独立へ向けての準備が着々と整えられていきました。

昭和50年2月1日、名東区が誕生しました。名東区の区域は、旧猪高町の区域のうち宮根学区を除いた区域に、昭和区梅森坂学区を加えた地域となりました。宮根学区は分区反対者が多かったので分区独立から除外されました。また梅森坂学区は地理的条件、交通手段、生活圈などから分区独立に際して名東区の区域に含まれました。

(2) 「ミッキー」登場

昭和60年4月30日に引山～栄間の10.2kmで中央走行方式の基幹バスが全国で初めて運行されました。カラー舗装された専用(優先)バスレーンと低床式の新型バスにより、表定速度20km/h(市バスの平均は12.8km/h)を達成、スピーディーかつ快適な都心への足が確保されました。名東区の北部地域の人々にとって地下鉄に代わる交通手段としておおいに利用され、今では1日約3万人の利用客があります。



引山バスターミナル

(3) 市制100周年と名東区

明治22年に市制が施行され、平成元年10月には名古屋市制100周年を迎えました。市内各地でこれを祝っていろいろな祝典が催され、名東区でも昭和63年、平成元年と2年にわたってお祝いの行事が盛大に行われました。

記念事業の幕開けとして、昭和63年10月1日には、区内の長寿者(99歳以上のお年寄り14人)を記念事業実行委員会委員が訪問してお祝いをしました。同10月23日には区内4コースでウォークラリーを実施、約1千人の参加者がありました。同11月3日にはバス7台による区内の文化財、名所などを巡る「めいとうウォッチング」が催されました。

平成元年5月21日には、猪高中学校・小学校において「お祭り広場」が開催され、あいにくの天候にもかかわらず区民1万5千人が参加しました。また交通事情などで長年行われていなかった「^{おまん}馬の塔」をこの機会にぜひとも復活させたいという願いから、高針、猪子石地区と「お祭り広場」の間を「おまんと行列」が往復し、その勇壮さと豪華さを区民に披露しました。古式にのっとりた行列や、火縄銃の実演などを名東区内で見ることができたと、区民に大好評でした。

(4) 区民まつり

分區独立後も人口は年々増加し、平成元年には名東区の人口は15万人に膨れ上がりました。都市化が進む中で区民相互のふれあい・交流の場をもうけることによって、区民にふるさと意識を持ってもらおうと、区民まつりが企画されました。



おまんと行列

平成2年8月25日に西一社中央公園において「区民まつり『友・遊ひろば』」と銘打って第1回区民まつりが開かれました。以来毎年開催されることとなり、本郷公園、高針台中学校、廻間公園と順次場所を変えて実施されました。区内の各種団体や公益法人、官公所(署)が参加し、ステージあり、各種出店あり、踊り、太鼓、棒の手と夏の一大イベントとなりました。

第3章 区域の変遷・町名変更

1 区域の変遷

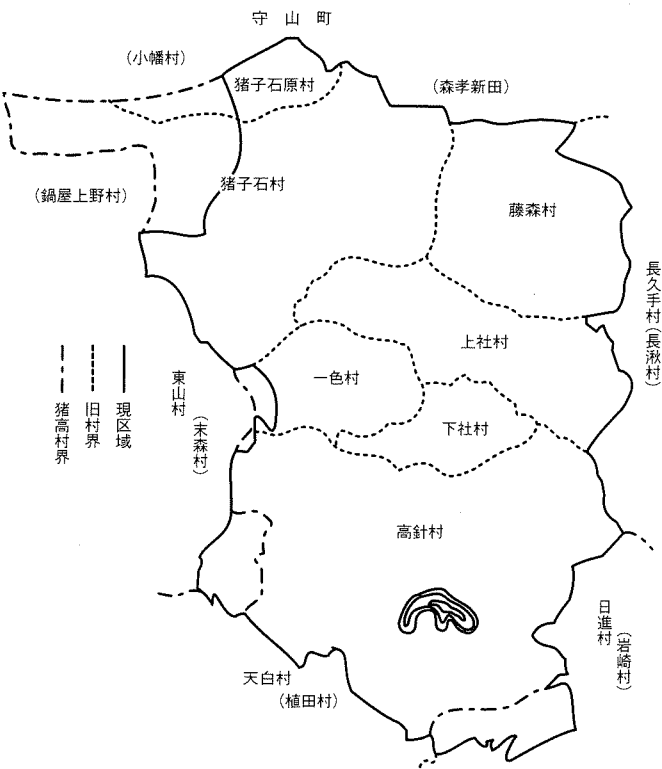
江戸時代、名東区の区域の大部分は、東春日井郡猪子石原村（明治22年愛知郡へ）と愛知郡猪子石村・藤森村・高針村・上社村・一色村・下社村の7村に分かれていました。明治11年郡区町村編成法により、一色村と下社村が合併し一社村となり、明治22年市制町村制施行により、猪子石原・猪子石・藤森村が合併し愛知郡猪子石村に、上社・一社・高針村が合併して高社村ができ、旧村名を大字名として残しました。さらに、猪子石村と高社村が合併して、両村の頭文字をとって愛知郡猪高村と称し、1村6大字になったのは明治39年のことでした。

昭和30年に猪高村は名古屋市に合併して、名古屋市千種区猪高町となり、同50年2月1日、猪高町は昭和区梅森坂学区を合せて、千種区から分離独立して「名東区」が誕生しました。

猪高の移り変わり

江戸時代↓	明治11年↓ (郡区町村編成法)	愛知郡上社村	愛知郡一色村	愛知郡下社村	愛知郡高針村	愛知郡藤森村	愛知郡猪子石村	東春日井郡猪子石原村
明治22年↓ (市制町村制)	愛知郡高社村	愛知郡猪子石村						
明治39年↓ (町村合併)	愛知郡猪高村							
昭和30年↓ (名古屋市に合併)	名古屋市	千種区猪高町						
昭和50年↓ (分區獨立)	名古屋市	名東区						

村の位置図



7つの旧村と猪高村の区域。北西部は現在千種区に編入されている

2 町名変更

名東区の区域は、昭和36年5月1日を皮切りに、町名変更が数多く行われました。新しい町名で、希望と夢のある新しい町づくりを進めることは、非常に意義のあることですが、一方無くなっていく旧の町字名には由緒あるものも多く有り、一抹の寂しさを感じさせます。かつて、名東区には、6の「大字」と、数多くの「小字」がありましたが、町名変更によりほとんど無くなってしまいました。

(1) 大字・小字名

大 字	小 字
たか ばり 針 高 針	あらた うめもりぎか おおばり おばた おく て おばき ま きたじま こたに ごくらく しん やしき まえ せ こぼろ 荒田、梅森坂、大針、小畑、大久手、大廻間、北島、古谷、極楽、新屋敷前、勢子坊、 にしやま はら ふか だ いけ まき まえ だ まえやま まつ い やま の なか 西山、原、深田池、牧、前田、前山、松井、メクソ、山ノ中
いっ しゃ 社 一 社	あらはた あか ほ で あしはぎ ま いり た うしろだ かみ うしろだ しも おち だ かたつか なねはら かみうちこし かめ の い 荒幡、赤穂出、足狭間、杵田、後田上、後田下、落田、片塚、兼原、上打越、瓶ノ井、 こしまえ しも だ しもうちこし なかうちこし なか ねどおりかみ なか ねどおりしも にしうら ふじつか まえやま まち だ まつした 越前、下田、下打越、中打越、中根通上、中根通下、西浦、藤塚、前山、町田、松下 ま と ば みょうけんまえ わかいだ やま の た りく の まえ 的場、明見前、向田、山ノ田、陸之前
かみ やしろ 社 上 社	あしばき ま い ぼり いけ の うら いけ の おもて い もの し ほら うしろだ こ い ぼり じん でん ちょうだ な が れ なかじま 足廻間、井堀、池ノ浦、池ノ表、鋳物師洞、後田、小井堀、神田、丁田、流、中島、 なえしろ だ にしやま はちろう ひめわか ひらいけ ひがしやま ひしゃくば ほら まえ だ よけひがし 苗代田、西山、八郎、姫若、平池、東山、柄杓場、洞、前田、除 東
ふじ もり 藤 森	いろ た いし が ね いり の いけ おく た か な れ こ いけが り きく た たかやなぎ なかだん ふじ の き ほらまえ もり 色田、石ヶ根、杵ノ池、大久田、香流、小池刈、作田、高柳、中段、藤ノ木、洞前、森
いの こいし 猪子石	あかさか あかまつ あぶらでん いのしり うちこし うなぎばき ま うば が たに えんじゅ か な れ かめどり かみがいと 赤坂、赤松、油田、猪尻、打越、鱧廻間、姥ヶ谷、延珠、香流、亀鳥、上垣外、 かしや づ かみどうち かみ の き かみすげばき ま かみはつたんだ きょうめい きた ひ ら くごう た こうかん こさか 化者業、上道池、神ノ木、上菅廻間、上八反田、京 命、北比良、九合田、交換、小坂、 しもつば しゃぐち しもどうち しん やしき じ あ み しもすげばき ま しもはつたんだ たかね つちくじり と ばき ま 下坪、社口、下道池、新屋敷、地アミ、下菅廻間、下八反田、高根、土久尻、梅廻間、 なかじま な なれ にしぼら にごりいけ によらいどう はちまえ ひがしうら ひがしじま ひきやま ひろ た ふか ば ふくじゅほら 中島、名流、西洞、濁池、如来道、八前、東 浦、東島、引山、広田、深場、福寿洞、 まえやま まる ね みや ね みずくみさか や せ まち やま の た やま の て よも ぎ ほら 前山、丸根、宮根、水汲坂、八畝町、山ノ田、山ノ手、蓬萊洞 (えの き おおばやし おおはた だ かみたけこし きたく る り し し みち しも だ しもたけこし たけこし にしやま の だ はちまん みなみく る り やま の はた 野田、八幡、南久留里、山之端)
いの こいしはら 猪子石原	かけした きたかわ ら しんひきやま てんじんした なか の きり にし の きり ひがし の きり むらさき おお た 欠下、北川原、新引山、天神下、中ノ切、西ノ切、東ノ切、村崎、(太田)

() は、現在千種区です。

名東区現町名図



(2) 町名の変遷

旧町名および字名	新 町 名	町 名 の 由 来	施行年月日
猪高町大字高針字大廻間、西山、大久手および昭和区天白町大字植田字植田山	名東本通 1 丁目～5 丁目	この地域は都市計画街路沿線の両側に面し、この街路が名古屋市東部本通の意味を持つため。	36. 5. 1
	にじが丘 1 丁目～3 丁目	虹ヶ丘団地にちなんで。	
	代万町 1 丁目～3 丁目	地元から孫子の代まで栄えるようにと万代町を希望したが、万代町は市内に既にあるので代万町とした。	
	神丘町 1 丁目～3 丁目	この地域は「山ノ神」と呼ばれていたのと、丘陵地であることから。	
	西里町 1 丁目～5 丁目	字名「西山」にちなんで。	
	扇町 1 丁目～3 丁目	新しく区画された地域が扇状であることから。	
	西山本通 1 丁目～3 丁目	この地域は都市計画街路沿線の両側に面し、この街路が西山の集落への主要交通道となるため。	
	植園町 1 丁目～3 丁目	字名の「植田山」と、地域が東山公園に隣接しているところから。	
昭和区植園町	千種区植園町	行政区域変更	36. 11. 1
昭和区天白町大字植田字植田山	千種区天白町大字植田字植田山	行政区域変更	37. 11. 1
天白町大字植田字植田山	藤巻町 1 丁目・3 丁目	付近の「藤巻山」より。	38. 1. 28
	植園町 1 丁目・3 丁目		
猪高町大字高針字大廻間、西山	神里一丁目 神里二丁目	この地域は「山ノ神」と呼ばれていたので「神」を用いて神里とした。	42. 4. 8
猪高町大字高針字大廻間	高間町	大字「高針」の「高」と字名の「大廻間」の「間」をとり「高間町」とした。	44. 5. 9
	神里一丁目		
猪高町大字高針字大針、新屋敷前、前山、松井、前田	新宿一丁目 新宿二丁目	この地区の北部には中馬街道が通り、信濃馬のための宿場があったことと、字名の「新屋敷前」にちなんで。	45. 4. 8

旧町名および字名	新 町 名	町 名 の 由 来	施行年月日
猪高町大字藤森字高柳、小池刈、作田、大久田、色田、藤ノ木、中段	明が丘	住民の明るい生活を願って。	45. 7. 30
	朝日が丘	東斜面の地勢により朝日の美しさが格別であるところから。	
	小池町	灌漑池・小池刈池と字名「小池刈」にちなんで。	
	宝が丘	この地域の南部は南傾斜で住宅地として最適地であり宝玉のような価値があるとして。	
	富が丘	富裕な生活ができることを願って。	
	望が丘	東名高速道路と地下鉄に地域の発展を願って。	
	藤香町	字名「藤ノ木」と香流川にちなんで。	
	藤が丘	大字「藤森」の藤をとるとともに地下鉄「藤ヶ丘」にちなんで。	
	藤里町	字名「藤ノ木」にちなんで。	
	藤見が丘	藤が丘地区の南に一段高く位置し「藤ヶ丘」駅を眺めつつの生活にちなんで。	
	豊が丘	豊かな生活を願う気持ちから。	
	照が丘	藤が丘地区の東南部に位置し地域内では一番高い地区であり、緑と太陽のある住宅地であるため。	
猪高町大字一社字町田	陸前町	地域の字名「陸之前」にちなんで。	47. 7. 20
	野間町	地域の通称名「野間」にちなんで。	
	神里二丁目		
	高間町		
猪高町大字藤森字石ヶ根、香流、高柳、洞前、杣ノ池、大久田、色田	石が根町	字名「石ヶ根」にちなんで。	49. 11. 1
	藤森一丁目 藤森二丁目	大字「藤森」と造成前には地域の至る所に藤の花が咲いていた名残を残すため。	
	丁田町	地域内の猪高小学校、中学校のある辺りを「丁田山」と呼んでいたところから。	
	本郷一丁目 } 本郷三丁目	この地域の通称名「本郷」にちなんで。	
	姫若町	地域の字名「姫若」と植田川に架かる「姫若橋」にちなんで。	
	上社二丁目	大字「上社」にちなんで。	

旧町名および字名	新 町 名	町 名 の 由 来	施行年月日
	小池町 ―― 望が丘 ―― 宝が丘 ―― 藤が丘		
猪高町大字高針字大廻間、大字一社字瓶ノ井、越前	一社二丁目 一社四丁目 ―― 亀の井一丁目 } 亀の井三丁目 ―― 神里一丁目 ―― 高間町	大字「一社」にちなんで。 この地域の字名「瓶ノ井」にちなんで、瓶を亀と改めて命名。	49. 11. 15
千種区、天白区の一部	名東区	行政区画変更	50. 2. 1
猪高町大字一社字後田上、後田下、中根通上、中根通下、向田、上打越、下打越、中打越、大字高針字大廻間、大字上社字除東	社台一丁目 } 社台三丁目 ―― 高社一丁目 高社二丁目 ―― 貴船一丁目 ―― 上社四丁目 ―― 一社一丁目 } 一社四丁目 ―― 亀の井一丁目 } 亀の井三丁目	大字「一社」「上社」の「社」と高台であることから。 昔、一社村になる前の高社村の名前にちなんで。 貴船神社にちなんで。	51. 10. 3
猪高町大字猪子石字梅廻間、八前、濁池、八畝町、西洞	平和が丘一丁目 } 平和が丘五丁目 ―― 八前三丁目 ―― よもぎ台一丁目 } よもぎ台三丁目 ―― 社台一丁目	この地域の西側一帯が平和が丘として市民に親しまれる場所なので。 字名の「八前」にちなんで。 この地域が丘陵地帯に位置しているのと同関係ある地域の字名「蓬萊洞」にちなんで。	51. 10. 10

旧町名および字名	新 町 名	町 名 の 由 来	施行年月日
千種区田代町字瓶、 同猪高町大字一社字 中根通上	名東区田代町字瓶 、同猪高町大字 一社字中根通上	行政区域変更	52. 1. 23
猪高町大字猪子石字 高根、梅廻間、田代町 字瓶	桜が丘 ―― 平和が丘三丁目 平和が丘四丁目 ―― 社台一丁目 ―― 高社一丁目	通称として使っていた「桜ヶ丘」を用いた。 ―― ―― ―― ――	52. 1. 23
猪高町大字高針字大 針、極楽、松井、梅森 坂	大針一丁目 ―― 大針三丁目 ―― 新宿一丁目	字名の「大針」にちなんで。 ―― ――	52. 5. 29
守山区大字森孝新田 字丁	名東区大字森孝 新田字丁	行政区域変更	54. 4. 10
猪高町大字高針字極 楽、大針、松井、勢子 坊	極楽一丁目 ―― 極楽三丁目 ―― 大針一丁目 大針二丁目	字名の「極楽」を残すことを主眼にした。 ―― ――	54. 6. 17
猪高町大字高針字梅 森坂、新屋敷前、前 山、松井	新宿一丁目 新宿二丁目		55. 9. 23
猪高町大字高針字大 廻間、星が丘1丁目、 名東本通1・2丁目	名東本町	住民のアンケートにより、この地域の南端が名東本通に面していることから。	55. 10. 26
猪高町大字高針字大 久手、西山	西山台	字名の「西山」と丘陵地であることから。	56. 5. 17
猪高町大字高針字極 楽、古谷、松井、新宿 一丁目	極楽五丁目 ―― 新宿一丁目 ―― 松井町	―― ―― ―― 字名の「松井」による。	56. 6. 14
猪高町大字猪子石字 梅廻間、田代町字鹿 子殿、富士見台5丁 目	平和が丘一丁目 ―― 平和が丘三丁目		56. 9. 20

旧町名および字名	新 町 名	町 名 の 由 来	施行年月日
天白区大字植田字植田山	藤巻町 2 丁目		57. 8. 29
明が丘、猪高町大字 藤森字香流、高柳、中段、藤ノ木、森、小池町、藤里町、森孝新田字丁	高柳町	字名の「高柳」にちなんで。	57. 10. 31
	藤里町		
	藤森西町	旧藤森村の西に位置しているところから。	
	豊が丘		
	小池町		
	石が根町		
	本郷一丁目		
猪高町大字一社字兼原、藤塚、大字上社字足廻間、池之浦、池ノ表、鑄物師洞、後田、小井堀、神田、丁田、苗代田、中島、流、西山、八郎、東山、柄杓場、姫若、平池、洞、前田、山ノ田、除東、大字高針字勢子坊、大字藤森字大久田	社が丘一丁目 }	大字「上社」の「社」と丘陵地であることから。	59. 2. 11
	社が丘四丁目		
	猪高町		
	貴船一丁目 }		
	貴船三丁目		
	上社一丁目 }		
	上社五丁目		
	小井堀町	字名の「小井堀」にちなんで。	
	姫若町		
	上菅一丁目 上菅二丁目	字名の「上菅廻間」にちなんで。	
	高社二丁目		
	丁田町		
	社口一丁目 社口二丁目	字名の「社口」にちなんで。	
	社台一丁目 }		
	社台三丁目		
	よもぎ台三丁目		
	本郷二丁目		
	藤森一丁目		
	一社三丁目		

旧町名および字名	新 町 名	町 名 の 由 来	施行年月日
猪高町大字高針字前田、前山、牧	高針一丁目 高針二丁目	大字「高針」にちなんで。	59. 9. 23
	牧の里一丁目 } 牧の里三丁目	字名の「牧」と牧野ヶ池から水を引き田畑が潤った里であったことから。	
猪高町大字高針字大久手、原、前田、牧	牧の里二丁目 牧の里三丁目		60. 7. 21
	牧の原一丁目 牧の原二丁目	字名の「牧」と「原」にちなんで。	
猪高町大字一社字兼原、町田、松下、大字高針字大廻間、小畑、北島、極楽、勢子坊、深田池、古谷、前田	猪高町		61. 2. 9
	勢子坊一丁目 } 勢子坊四丁目	字名の「勢子坊」にちなんで。	
	野間町		
	陸前町		
	高針一丁目 } 高針四丁目		
	神里一丁目		
	高針台一丁目 } 高針台三丁目	高針の台地上に広がっている地域という意味から。	
	極楽一丁目 極楽四丁目 極楽五丁目		
	新宿一丁目		
	牧の里一丁目		
	猪高町大字猪子石字赤坂、油田、猪尻、打越、鱧廻間、姥ヶ谷、延珠、化者業、香流、上垣外、上菅廻間、上道地、神ノ木、上八反田、亀鳥、京命、北比良、九合田、交換、小坂、社口、下菅廻間	赤松台	
つつじが丘		つつじが多かったところから地元の要望により。	
山の手一丁目 } 山の手三丁目		字名の「山ノ手」にちなんで。	
延珠町		字名の「延珠」にちなんで。	
引山一丁目 引山二丁目		字名の「引山」にちなんで。	

旧町名および字名	新 町 名	町 名 の 由 来	施行年月日
下道池、下坪、下八反田、新屋敷、地アミ、土久尻、梅廻間、中島、名流、如来道、濁池、福寿洞、八前、東浦、東島、引山、広田、深場、前山、丸根、水汲坂、宮根、八畝町、山ノ田、山ノ手、蓬萊洞、大字猪子石原字新引山、中ノ切、西ノ切、東ノ切、大字上社字鋳物師洞、丁田、大字藤森字香流	香流一丁目 }	香流小学校にちなんで。	
	香流三丁目		
	香南一丁目 香南二丁目	香流川の南に位置しているので。	
	八前一丁目 }	字名の「八前」にちなんで。	
	八前三丁目		
	猪高台一丁目 猪高台二丁目	猪高の地名と高台であるところから。	
	猪子石一丁目 }	猪子石小学校にちなんで。	
	猪子石三丁目		
	藤森西町		
	文教台一丁目 文教台二丁目	名東図書館があり丘陵地であることによる。	
	若葉台	若葉のきれいな丘陵地であるところから。	
	上菅一丁目 上菅二丁目		
	社口一丁目 社口二丁目		
	香坂	香流川と字名の「水汲坂」にちなんで。	
	神明町	神明社と月心寺の両社寺から命名。	
	よもぎ台一丁目 }		
	よもぎ台三丁目		
	丁田町		
	藤森一丁目		
	平和が丘一丁目 平和が丘四丁目 平和が丘五丁目		
	社台一丁目		

旧町名および字名	新 町 名	町 名 の 由 来	施行年月日
猪高町大字一社字赤穂出、足狭間、荒幡、杵田、落合、片塚、兼原、下田、西浦、藤塚、前山、町田、松下、的場、明見前、山ノ田、陸之前、大字上社字足廻間	貴船一丁目 }		61. 8. 31
	貴船三丁目		
	陸前町		
	勢子坊一丁目		
	勢子坊二丁目		
	亀の井三丁目		
	社が丘三丁目		
	上社五丁目		
	高間町		
	一社四丁目		
猪高町大字高針字梅森坂、天白町大字植田字梅森坂	梅森坂一丁目 }	猪高町と天白町の字名の「梅森坂」にちなんで。	62. 8. 24
	梅森坂五丁目		
	梅森坂西一丁目 梅森坂西二丁目	このあたりを西町と呼んでいたことと字名の「梅森坂」にちなんで。	
大針一丁目 大針二丁目	大針一丁目 大針二丁目	一部地番変更	62. 11. 15
猪高町大字猪子石原 字新引山	引山三丁目 引山四丁目		63. 8. 29

第4章 人口・住宅

1 人口の状況

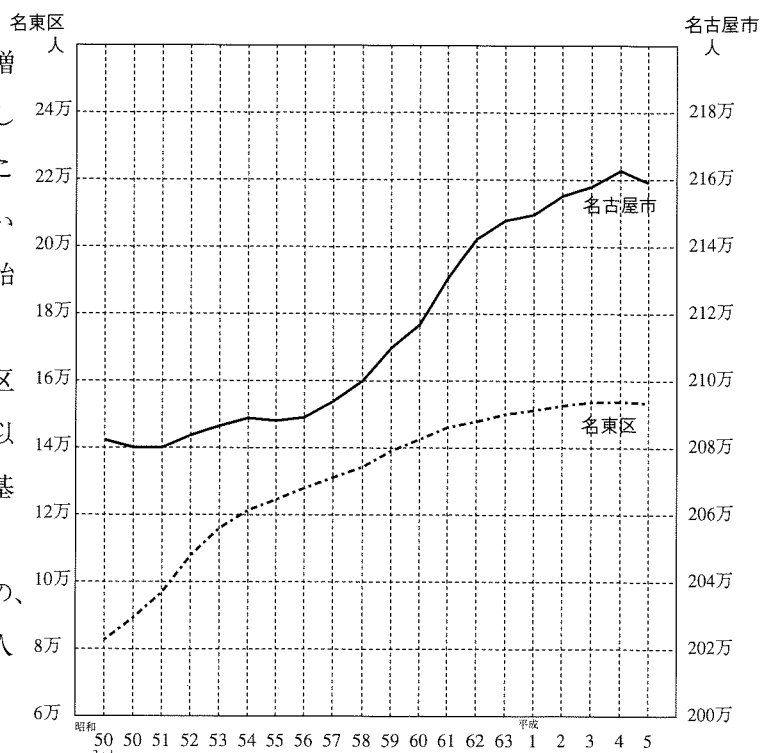
(1) 人口の推移

分区（昭和50年2月1日）当初は、人口増加率は対前年比で毎年10%近くの上昇を示していましたが、年々鈍化の一途をたどり、ここ数年は1%程度の伸びを示し、ほぼ横ばい状態です。平成5年10月1日には分区以来始めて前年の人口を下まわりました。

これは、猪子石・上社地区等、大規模な区画整理の終了と、地価の高騰により、分区以来続いた名古屋市のベッドタウンとしての基盤作りがほぼ終わったためと思われます。

今後は、単身者等の移動は引き続くものの、名古屋市のベッドタウンとして、安定した人口で推移するものと思われます。

名古屋市と名東区の人口の推移（毎年10月1日）



(2) 各区の人口・世帯数・人口密度の比較

平成5年10月1日現在名東区は、中川区・緑区・北区・南区に次いで16区中5番目の人口を有しており、以下、千種区・港区・守山区と続きます。注目すべき点として、市全体の人口が停滞傾向にあり、中川区・緑区等の増加している区においても、1%前後の低い前年比で、これは、名古屋市周辺市町村へのドーナツ化現象と考えられます。

名東区は、アパート・マンションが多く、単身者の比率が高く、年々世帯数は増加していますが、一世帯当たりの人口は年々減少しています。

名東区の面積は19.46km²で、名古屋市の5.96%、人口密度は7,876人で、16区比較では9番目に当たり、人口密度は低い部類に入ります。

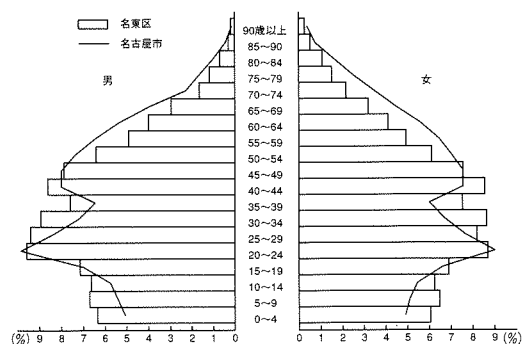
名古屋市の面積と人口・人口密度（平成5年10月1日現在）

	面積(km ²)	世帯数(世帯)	人口(人)	1世帯当りの人口(人)	人口密度(人)
千種区	18.24	65,335	151,511	2.32	8,307
東区	7.72	28,007	67,090	2.40	8,690
北区	17.55	65,997	173,457	2.63	9,884
西区	17.90	52,933	139,213	2.63	7,777
中村区	16.32	56,899	142,861	2.51	8,754
中区	9.36	30,449	64,081	2.10	6,846
昭和区	10.93	46,722	105,358	2.25	9,639
瑞穂区	11.23	42,892	108,722	2.53	9,681
熱田区	8.16	25,761	65,871	2.56	8,072
中川区	32.01	71,109	204,562	2.88	6,391
港区	45.57	51,267	149,279	2.91	3,276
南区	18.47	59,302	158,422	2.67	8,577
守山区	34.02	50,961	148,536	2.91	4,366
緑区	37.86	61,883	185,361	3.00	4,896
名東区	19.46	59,978	153,272	2.56	7,876
天白区	21.57	55,610	141,117	2.54	6,542
全市	326.37	825,105	2,158,713	2.62	6,614

(3) 人口比率

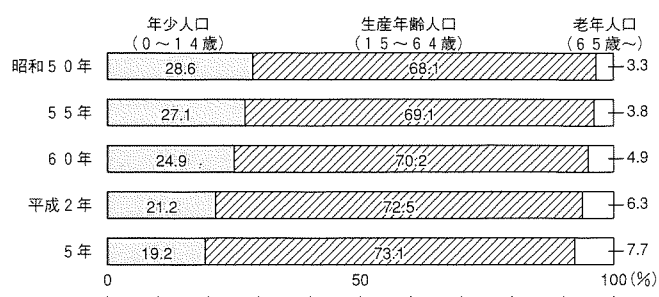
名東区が『若い町』・『新しい町』といわれる所以は、20歳代後半から40歳代までの年代と15歳未満の人口比率が名古屋市全体のそれより高いからです。これは、義務教育までの子供を持つ家庭が多く、かつ、名東区への転入者が、20歳代から30歳代であり、50歳代以上の年代の人口増の要因が少ないためと思われます。

年齢5歳階級別人口構成比（平成5年10月1日現在）



年齢3区分 人口比率の推移

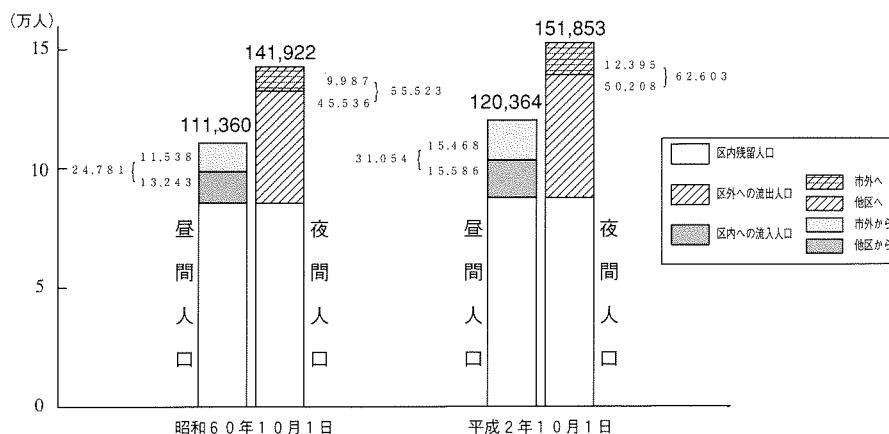
(各年10月1日現在)



分区以後、20年の間に老年人口の比率のみが、2倍以上の伸びを示しています。これは、名古屋市全体と同様の傾向です。生産年齢人口は、名古屋市全体とはほぼ同様な比率で推移しています。また年少人口は、名古屋市全体の比率より5%前後高めに推移しています。

名東区は、夜間人口に対して昼間人口が下回っています。名古屋市全体の中で、東部住宅地域の4区（緑・守山・名東・天白）は昼間人口比率が90%に達していませんが、中でも名東区は80%にも達していない状況です。中心地域の中区・東区・中村区への昼間人口の集中が大きくなっています。

昼間人口と夜間人口



2 人口動態

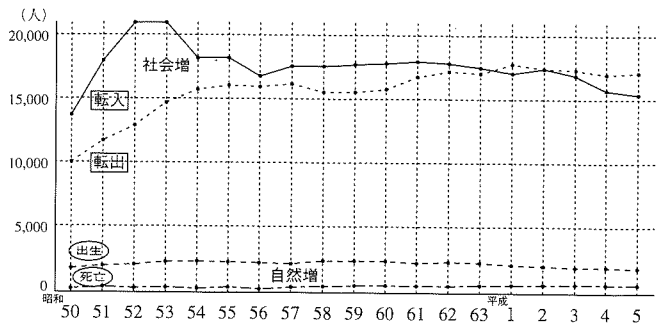
(1) 自然動態

名古屋市全体の出生率は減少傾向にあり、これは、名東区でも同じです。近年は、20歳から34歳の高出産期の女性の晩婚化、晩産化、少子化などの傾向があり、今後もこの傾向は続くものと思われます。

死亡数は微増傾向ですが、平均寿命の伸長などで高齢化が進み、死亡率では減少しています。

今後の自然増減は第2次ベビーブーム期（昭和46年～49年生まれ）の女性が高出産期となり、出生数の増加が期待できますが、人口の高齢化による死亡数の増加も避けられず、自然の増減に、大きな変化はないものと思われます。

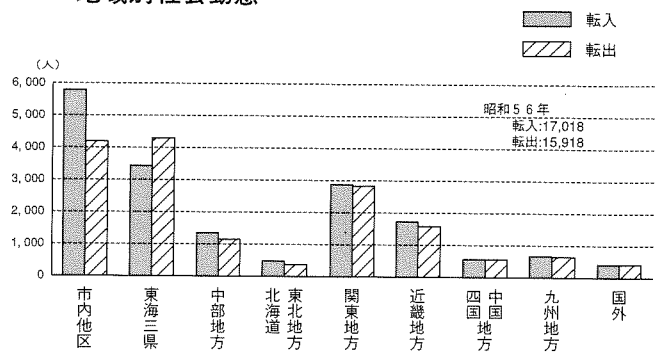
自然動態と社会動態（各年10月1日）



(2) 社会動態

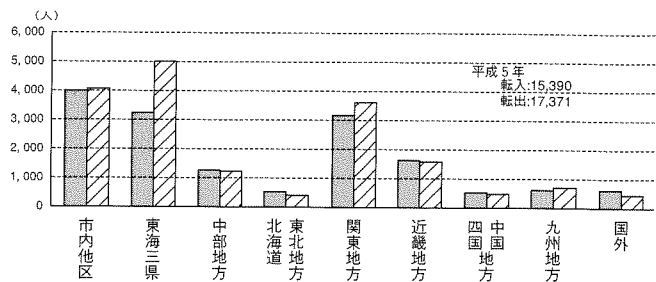
名古屋市全体では昭和41年から社会減の一途をたどっています。名東区は分区以来、社会増を続けていましたが、平成元年以降は社会減に転じています。平成5年には、16区中12区で社会減になり、うち6区が1千人以上の社会減でした。名東区は千種区に次いで社会減の多い区となっています。

地域別社会動態



(3) 他地域との人口動態

市内他区からの転入が年々減少しています。また、名東区から東海三県への転出が年々増加しています。これらの現象は、以前は、名東区が名古屋市のベッドタウンでしたが、昭和62年頃からの好景気により、名古屋市周辺市町村の住宅建設が増加したことが原因と思われます。



3 住宅

昭和30年に名古屋市に合併した当時、猪高村の住宅数はおよそ1,500戸でした。土地区画整理事業の進展に合わせて住宅建設が驚異的に進みました。昭和53年10月調査では、名東区の住宅数は32,800戸となり、内1戸建の住宅が11,600戸で35.4%でした。昭和63年10月には、住宅数が50,440戸、1戸建は13,430戸、26.6%になりました。この間に、共同住宅が多く建設され、共同住宅は35,490戸と、全体の70.4%を占めるようになりました。

名東区の住宅数の推移

(住宅統計より)

調査日	総 数	1戸建	長屋建	共同住宅	その他
昭和53年10月	32,800	11,600	1,500	19,700	
昭和58年10月	42,010	12,830	1,760	27,320	100
昭和63年10月	50,440	13,430	1,480	35,490	50

昭和33年から34年の市営猪子石原住宅368戸を皮切りに、日本住宅公団（現在の住宅都市整備公団）が昭和34年から昭和41年にかけて約1,600戸の虹ヶ丘の4団地を建設するなど、共同住宅の代表的な大規模公営団地が建設されました。

昭和40年代には43年から45年にかけて市営猪子石荘の1,305戸、46年から47年には市営梅森荘の1,259戸、昭和44年から始まった県営猪子石住宅の410戸、日本住宅公団の藤ヶ丘市街地住宅456戸などの団地・住宅が約4,300戸建設されました。

昭和50年代は、昭和52年の県営高針住宅の714戸を始め、市営藤ヶ丘荘・引山荘・やしろ荘、天神下荘、県営梅森坂住宅などが新築、建て替え等をしながら約1200戸建設されました。

公営住宅数

(年度末調)

年	総 計	市営住宅	県営住宅	日本住宅公団
昭30	0	0	0	0
昭40	1,662	658	0	1,004
昭50	5,656	3,222	410	2,024
昭55	6,439	3,222	1,193	2,024
昭60	6,929	3,399	1,403	2,127
平 2	7,324	3,730	1,392	2,202
平 4	7,268	3,710	1,392	2,166

(市営・県営住宅数は、各供給公社分も含む。)

団地等配置図

